

〈研究ノート〉

ミドルマンのすすめ*

— 「役に立つ」社会学・ノート（1） —

高 坂 健 次**

はじめに

先の関西社会学会大会(1999年6月5日・6日)の統一テーマは、「社会学の可能性」であった。その統一テーマのもとに4つのミニ・シンポジウムも企画され、内容はまちまちであったとはいえ、すべてが「社会学の可能性」という傘の下で構成された。因みに、4つのミニ・シンポジウムが個別に掲げたテーマは、「社会学は「役に立つ」か?—犯罪・社会問題の経験的研究を通して考える—」、「ディシプリンとしての社会学—そのアイデンティティとキャパシティ」、「臨床のことばと学(術)のことば」、「知の考現学としての可能性—であった。社会学の可能性というテーマを取り上げるについては雑多な動機が混入しているだろうが、ある人にとっては「このようなことができる」といった積極的な主張の機会であるし、また別の人にとっては「どのようなことができるのだろうか」という、はなはだ確信のもてない話か、せいぜいおそろおそろの弱い主張の機会であったであろう。今しがたあげたミニ・シンポジウムのタイトルにしてからがすでにそのことを物語っているように思われる。しかし、いずれにしても、社会学に何ができるかが社会学者の意識に上っていることだけは間違いがない。

もっとも、こうした社会学の可能性を問う視点は今に始まったことでは決してない。そもそも社会学という個別科学の誕生が、ヨーロッパ再組織の為の担い手としての社会学の可能性に期待するところが大きかったと言えるし、そこまで溯らないまでも、その時代その時代で繰り返し問われつ

づけてきたテーマである。

本稿では、社会のあり方を問題にした上で、社会状態や人々の行動に関してかくかくしかじかにすべしとかあるべしと発言しようとする社会学を「規範的社会学」と呼ぼう。それは当然「役に立つ」ことをはじめから目指していると思われるが、ここで「役に立つ」と言うのは「規範的社会学」に限らない。説明的社会学であれ、理論的社会学であれ、記述的社会学であれ、その他どのような呼び方をするにせよ、やはり直接間接に「役に立つ」ことがあるように思われるからである。

論点もあちこちに飛んだり何度も同じ所を行きつ戻りつするだろうことを最初にお断りしておきたい。第1回目は、ラザーズフェルドたちの議論に立ち返りたい(Lazarsfeld et al., 1967)。彼らの議論と編著は、1962年に開催されたアメリカ社会学会大会での主要テーマであった「社会学の効用」をめぐる議論に基づいている。社会も異なるし、時代背景も違う。何分、古い。にもかかわらず、彼らの議論を取り上げるのは、この種の問題を考えると私の個人的な準拠枠が、いつもそこにあるからだ。しかも最近では彼らの議論をまったく知らないか、忘れてしまっている向きも多いように見受けられる。因みに、私がこの厚みにして数センチ、ページ数にして900ページにおよぶ大著を最初に手にして拾い読みしたのは、1970年頃のことであった。すでに、その時からすれば30年の歳月が経過している。私自身その歳月の流れのなかで、改めて読み返す価値があると思うに至ったことも手伝っている。まずは、ラザーズフェルドたちに行く前に、二つの背景について触れておきたい。

*キーワード：ミドルマン、政策志向、社会学の効用

**関西学院大学社会学部教授

1 ヴェーバーの呪縛とマルクスの呪縛

日本の戦後の社会学史をひもとけば、そこには何の「役に立つ」かの問いかけを阻害する二つの呪縛があったように思われる。一つは、ヴェーバーのきわめて禁欲的な学問観であり、もう一つはマルクスの過剰なまでに実践的な学問観である。ヴェーバーの主張した「ヴェルトフライ」について、1960年代当時はまだ「価値判断排除」の訳語が生きていた。たしかに、ヴェーバー自身が、学問の立場では「かくかくしかじかの政策をとるべきであるとか、とるべきでない」といった発言が、とくに講壇（＝大学における講義）においては許されることではないと警告していたことは事実である。文句無しに科学的思考の対象となりうるのは、「与えられた目的にとって、どのような手段が適恰か、その手段の随伴結果はどのようなものか」である（ウェーバー、1998、原著は1904；引用符にもかわらず、ここでは原意を記したままで、原文にも訳文にも忠実ではない）。全体として禁欲的な学問観であるとの印象は拭いがたい。そうした学問観が、やがて日本において現実との緊張感を欠くことにつながっていったような印象を受ける。

1960年代なかば、とりわけ64年のヴェーバー一生涯百年祭のころから、ヴェルトフライを「価値自由」と言い換えられるようになった。このことによって、人々の受けた印象は多少とも変わったかもしれない。それは「価値から自由」とか「価値への自由」を意味し、価値判断から自由であったとしても、それを頭から排除してかかるものではないと思われるようになったからである。

ヴェーバーの場合、「価値自由」は二つの文脈から議論されている。一つは「職業としての学問」に関連してであり、もう一つは、社会（科）学の認識の客観性がどのようにして確保できるかに関連してである。むろん、この二つは底で深く連動しあっているから、ことさら文脈の違いを強調することは誤解を招くかもしれない。しかし、それにもかかわらず二つを当面分けておきたい気持ちがある。というのも、それぞれ基本的な文献が異なるからである。前者は、『職業としての学問』（原

著は、1919）であり、後者は『社会科学のおよび社会政策的認識の「客観性」』（原著は、1904）である。このうちのいずれを読むことで「価値自由」の概念を理解するかで多少イメージが変わってくるというのは断定的に過ぎるだろうか。少し慎重に調べてみないといけませんが、60年代なかばまでは学生には前者を優先して読ませたのでないか。それ以降は、後者の方を優先して読ませているのではないか。少なくとも私は、1962年に大学に入学して最初の必修科目の一つであった「社会学」で夏休みの課題の一つに「職業としての学問」を読まされた記憶がある。

今、手許に同じ編者（＝徳永恂）による学生が対象かと思われる二つの参考書ないし教科書がある。一つは『マックス・ウェーバー 著作と思想』（有斐閣選書、1979）であり、他は『人間ウェーバー 人と政治と学問』（厚東洋輔との共編、有斐閣双書、1995）である。前者の第1章は『職業としての学問』について、第2章は『社会科学のおよび社会政策的認識の客観性』についてとりあげて解説をしている。第3章には『ロッシヤーとクニース』があげられており、この3章で第I部「ウェーバーと学問」が構成されている。時代順に配列されていないのは、おそらくより一般的で基本的な視点が提示されているものを先にもってくるという編集方針でもあったのであろう。ここで興味深いのは、ともかく「ウェーバーと学問」を紹介するうえで「職業としての学問」をまず最初に据えている点である。それだけこの文献が基本的なものと認識されていたのであろう。それに対して後者においては、「職業としての学問」への言及はないわけではないけれども全体としては背景に霞んでしまっている。この一事をもって過剰な判断を下すことはむろん許されないが、「価値自由」の理解の文脈の力点が学問論から認識論へと時代とともに移っているのではないかということをお願いするのである。

前者に力点をおいて「価値自由」を理解すれば、「価値判断排除」すべきだとか教壇の禁欲を守らなくてはならないという理解に到達する。すべて話は don't（＝**してはいけない）である。他方、認識論に力点をおいて「価値自由」を理解すれば、しかじかの条件を守りさえすれば科学とし

ての客観性を守ることができるという理解に到達する。「価値解釈と価値自由な観点代替性によって、相対的にはあるが、認識の恣意性問題はある程度緩和される。このときはじめて、認識はその主観的価値前提にもかかわらず、相互主観的に妥当かつ有意義という意味で、客観的でありうる。」(徳永編、1995:74)。

このようにヴェーバーの学問論を理解する場合、どの文献から入るかで「価値自由」の理解や社会学研究に対する態度に微妙な違いが出てくる。

しかし、視点をずらすならば、いずれの文献から入るかにかかわらず、共通点も見えてくる。すなわち、いずれの場合も学問、科学、社会学の立場に立つための防衛(ディフェンス)の話だという点である。認識の客観性を確保しつつ、なお社会学がどのような課題に対してどのような形で役に立つのかという議論ではないのである。ここには学問や科学に「入る」話はあってもそこから「出ずる」話はないのである。別段、ヴェーバーのなかに「出ずる」話がなくても一向に構わないのだが、その影響が大きいために、多くの社会学徒が禁欲的になってしまったのではないかと考えられる。もっとも、学生であれ研究者であれ、読み手がヴェーバーの著作に全員親しんだという保障もないし、ヴェーバーのなかで学問論、客観性論に限定したということもないだろうから、過度の読み込みは禁物だが、それにしてもヴェーバーからは、多くの日本の社会学徒が、社会学の名の下にであれ否であれ、価値判断を要する領域に踏み込むことに尻込みをする性癖を学習してしまったのではないかと思われる。こうした禁欲的態度にヴェーバーの議論が、彼の真意は別として、影響あったように思われるが、ここであらためて過剰な禁欲的態度を抱かせる要因を「ヴェーバーの呪縛」と名づけておきたい。

他方、マルクスの立場は、フォイエルバッハにかんするマルクスの有名な第11テーゼに要約される。「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したもすぎない。大切なことは、しかし世界を変えることである。」マルクスの諸著作を十羽一からげにして語ることに無理があることを承知で言えば、マルクス主義ならびにマルクス主義に共通しているのは、学問(=階級闘争の理論)と実践(=

革命)とが深く絡み合っていた点である。しかし、その絡みはあまりにも密であったために、実践の学問と学問の実践との峻別があいまいになってしまった。極端な場合には、実践論に合わせて学問を加工したり、マルクス主義理論に合わせて実践のドメイン(=定義域)を決めるようなこともあったのではなかったか。やや唐突であるが、大橋隆憲の階級構成表にまつわるエピソード(橋本健二、1989)を紹介することによって、「マルクスの呪縛」があったという可能性の指摘に代えたい。

大橋隆憲は1959年の時点で、「新中間層」というカテゴリーを設けて、そこには非雇用者の専門技術職、事務職、保安・サービス職を含めていた。ところが、50年代以降、いわゆる大衆社会論が盛んになって、新中間層の拡大が注目されていた。大橋の階級構成表がこの新中間層拡大の証拠として教科書その他で使われたのはじめてなのである。そして新中間層が労働者階級とは異なる階層で、社会の安定化をもたらす勢力であることが強調されるようになった。「大橋による「新中間層」というカテゴリーの設定が、マルクス主義階級理論の否定と大衆社会論の擁護に利用されたのである」(橋本、1989:45)。このことは、大橋にとってはいわば意図せざる結果であった。そこで、大橋は「新中間層」という言葉の使用を止めたのである。今でも、大橋(1971)の階級構成表はマルクス主義者たちの間で広く使用されているが、そこでは新中間層は「いわゆるサラリーマン層」として、労働者階級の下位カテゴリーとして処理されている。ここには、「政治実践を基本的な基準とし、階級理論をこれに従属させる政治主義。日本の階級研究には、階級理論の過政治化(over-politicization)とでも呼ぶべき事態が定着してしまったのである。」(橋本、1989:46)。むろん、この一事をもって万事を類推することは妥当ではない。しかし、実践や政策との過剰な結びつきがあったことは否定できない。こうした態度を指して、あらためて「マルクスの呪縛」と呼ぶことにしよう。

日本の社会科学の歴史において、マルクスとヴェーバーの果たした役割は大きいですが、同時にこの影響の大きさが「二つの呪縛」をも生み出し、

その結果として社会学は適切な距離をもって実践的課題と向き合うことが少なくなりました。ところで、「役に立つ」社会学とは何を意味しているのだろうか。まず、役に立つということでのようなことを意味しているのだろうか。そのことについて触れておこう。

2 「役に立つ」とは

「役に立つ」ということは、ここでは広い意味での政策志向の社会学を指しておきたい。政策志向型社会学と、たとえば規範的社会学とは、互いに似ているけれども、ここでは互いに独立のものとして扱っていききたい。互いに独立であることは、規範的社会学にはなっていないけれども、社会学が役に立つこともあるし、規範的社会学の形をとっていても少しも役に立たない社会学もあることに着目すれば理解できるだろう。たとえば、社会意識に関する調査とその結果は、それ自体は規範的社会学ではないけれども、ある価値関心に立てば、政治家にとっても商売をする上でも役に立つ。逆に、たとえば社会学的分析の結論として、「企業犯罪に対する抑止機能は、公的な機関によって果たされるべきである」（平岡、1999）と主張したとしよう。しかし、この「ベキ論」に当の公的機関が耳を傾けなければ、結果としては少しも役に立たないことになる。（どうしてそういうことになるかについても、いずれ検討を加えたい。）さらに、規範的社会学の内容が根拠薄弱のために役に立たないことも少なくない。

役に立ち方もさまざまだ。マルクス主義からする役に立ち方は、大きな体制の変革の話の水準だったが、役に立つという話はずっと小さなレベルのものにまで拡大して視野に入れておきたい。ラザーズフェルド（1984、第7章）が昔挙げていたエピソードが、私には印象的でいつまでも心に残っている。それは、彼がまだウィーン大学の講師をしていたころの話である。彼は新しいスチーム式のクリーニング屋と契約を結んだ（社会学者—その時はラザーズフェルドは心理学者を自称していた—と契約を結んでまでして利益をあげようとしたクリーニング屋もなかなか見上げたもので

ある）。その店屋はその都市でその種の最初の店だったのだが、顧客を見つけるのに苦労をしていた。彼は、「なぜオーストリアの女性が自分たちの洗濯物を出しながらないか、また彼女たちの抵抗を克服するために何ができるかを見つけるための研究を行う」契約をしたのである。彼は、少数ではあったが新しいクリーニング屋に洗濯物を出したことのある主婦たちを調査して、その影響因を探ったのである。結論は、人は緊急事態に見舞われたときには洗濯を自分では行わずに、洗濯屋に出すということであった。なかには、骨折り仕事から解放された経験がきっかけで、洗濯屋を利用するということが習慣になったものもいたことが分かった。

ここまでがコンサルティングに応じた研究者の限界だった、とラザーズフェルドは述べている。因みに、このクライアントである洗濯屋の営業担当者は、市役所に出かけて最近亡くなったばかりの女性の名簿を入手して、家族に「洗濯について何とかしなくてはならないのではないのでしょうか。私どものサービスを利用してはいかがでしょうか」という意味のメールをだすというアイデアに到達し（そして、成功し）たのだそうである。このコンサルティング業務は、世の中のあり方を大きく変革する上で社会学が役に立ったわけではないだろう。しかし、そのクライアントからすれば、大変役に立ったのである。

要するに、何の目的のために役に立つのかだが、目的は体制の変革からクライアントの目的にいたるまでまちまちなものがありうることを認めておきたい。「役に立つ」社会学に従事しようとするものにとって、ある目的よりも別の目的の方が高邁であったり低劣であったりという受け止めかたがあろうけれども、ここでは目的に関してはオープンにしておきたい。もっとも、まったくオープンにしておいてよいかというと、倫理の問題があるのでそうは思わないけれども。（倫理の問題は、ずっとのちに検討したい。）

クライアントとは、社会学的知識をあてにして何らかの答えを期待している人びとの総称である。すぐ後に見るラザーズフェルドの図式に出てくるクライアントは、一言で言えば「行政」に尽きる。行政が社会学に何か（＝調査研究に基づく

答え)を期待しているという状況である。しかし、ここではもっともっと広く解釈しておきたい。したがって、先にあげた洗濯屋を開業しようとしている人間もクライアントである。社会学者をブレンとしている政治家が現実にどれほど居るのかは知らないが、そうしたケースがあれば、その政治家はクライアントである。クライアントは、したがって、個人であることもあれば、集合体であることもある。

行政を一つのセクターと見なすならば、「官」だけがクライアントになるわけではない。「産」も、「民」も「学」もクライアントになる。現在は、とくに産学連携に期待する向きが大きい。もっとも、社会学に対する「産」からの実際的な依頼はどの程度あるのかは少し調べてみないといけない。

比較的短期間で決着のつく（決着をつけなければならぬ）争点もあれば、長期に亙る争点もある。地域的に局所的に限定された争点もあれば、地球規模の争点もある。同じ、環境問題といっても局所的なものもあれば、大域的なものもあろう。また、空間的な概念は、文字どおりの地域的なものだけでなく、社会的空間についても同様のことが言える。すなわち、ある限られた世代のみに関する争点もあれば全世代に関する争点もある。

3 ラザースフェルドの図式

ラザースフェルドは、「役に立つ」こと和社会学に関して、次のような図式を提示している。私自身の言葉を多くして解説しておこう。基本的には、社会学者とクライアントとは、行政的文脈のなかで知的な関係を結び合う。行政的文脈とここでいうのは、クライアントからすれば、どの社会学者に依頼するかを決めなくてはならない。社会学者は多く居るし、どの社会学者が当該のテーマにふさわしいかは、外の社会からは分かりにくい。クライアントとしての依頼を引き受けるならば、報酬などについても決めなくてはならない。行政的文脈とは、これらの事を指している。社会学者のほうからすれば、外部資金を導入して自分自身や研究室の研究活動を促進するように折衝していかなくてはならない。

社会学者は、クライアントからの依頼を受ける以前からすでに研究者としての資源を持っている。社会学者はさまざまな理論に習熟しているし、社会学的概念も知っている筈だ。また、各種の調査方法や調査技術も大なり小なり体得していることだろう。また、社会学者はいくつもの役割をも負っている。単に、純粹の研究に従事するというだけではなく、批評家としての役割やコンサルタントとしての役割も負っている。

クライアントには、さまざまなタイプのクライアントがある。先の例で言えば、街のクリーニング屋さんもクライアントなら、行政府もクライアントでありうる。つまり、公的存在も民間もクライアントになる。クライアントはさまざまなタイプの問題を抱えている。人々のニーズをつかむこと、具体的目標を設定すること、政策の実行と評価、等々。

クライアントと社会学者の間には双方向の知的交流が行われる必要があると考えられている。クライアントから社会学者の方へは「問題」の翻訳がなされる。クライアントの抱えている生の「問題」は、そのままの形では社会学的問題にはなっていないということなのだろう。提示された「問題」が、そのままの形では社会学的問題とはならないという経験は、いわゆるクライアントではなく、大学生や大学院生が持ち込んでくる「問題」の場合でもある。たとえば、最近だと臓器移植の問題がその一つの典型例だ。人はしばしば臓器移植の「問題」をテーマに取り上げたいという。しかし、そのときの「問題」とは何か。未分化な「問題」は、まだ社会学的問題にはなっていないのである。昔、蔵内教授が富永教授の報告に対して、「華僑が問題だと言うけれども、華僑を社会学的な概念で言えば何に相当するのか」と尋ねられた由である。答えのほどは知らないけれども、現象的に見られる問題と社会学的問題とがずれることはしばしばなのである。要するに、ラザースフェルドは社会学的問題として生の問題を再定式化せよと言っているのである。その再定式化のことを翻訳と呼んでいるのである。この翻訳は、因みに社会学の素養がないと無理である。

他方、社会学者の方からクライアントに対しては、ギャップを飛び越えなくてはならない。

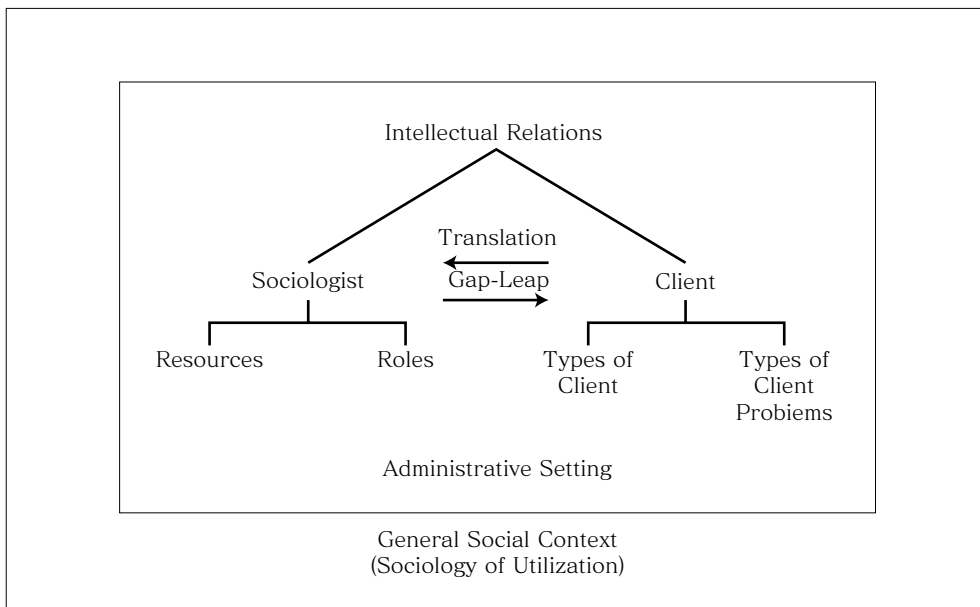


図1 社会学者とクライアントの関係 (Lazarsfeld、1967 : xii より)

「ギャップ」というのは、何と何の間のギャップかと言えば、「知識から決定へ」の、あるいは知識から行動へのギャップである。「ギャップの飛び越え」(Gap-leap)と言っているのは、実に言い得て妙である。どのような優れた研究であっても、実際の政策までには、短いか遠いかは別にして距離がある。つまり時間がかかる。しかもいつも代替案を提示しながら、政策の話を進めるいわけにもいかない。ちょっとした飛躍がそこには必要なのだ。政策を提案するときには、複数の代替案があっても困るのだ。社会学者の方から言えば、決定的なことが言えないときのほうが余程多い。

社会学者の R.M. ウィリアムズはかつて1970年代中頃にピッツバーグ大学で行った講演の中で次のようなことを話している。社会学者は、「二つの手を持っていることで、至極、行政には評判が悪い」と。二つの手、と彼が言った意味はこうだ。すなわち、社会学者は、そして良心的な社会学者であればあるほど、先ず“On the one hand,”と切り出しておいて、しばらくしたら、“On the other hand,”と続けて言う。かくて、二つの手を持っているというわけだ。ウィリアムズによれば、行政の人間(=官僚)は二つの手は要らない。答えとして欲しいのは、一つである。要するに、

どうすればいいのか、と。むろん、せっかちな行政マンや官僚を批判することはたやすい。社会学者だって、簡単に結論がつけられるのであれば、早く簡潔明瞭な答えを出すだろう。しかし、簡単に答えを出せないから、煮え切らない態度をとらざるをえなくなるのだ。したがって、学問的良心を守ることも大切だ。ところが、それでは現場は間に合わない、ということも事実なのである。

鳥越(1999:151-152)は、モンゴルでの調査依頼のときの経験について語っている。ここでのクライアントは、モンゴル政府である。クライアントの出した問題は「この国の山の樹木はどのくらいの割合以上を伐ってしまうと下の草原はダメになるか」であった。絡んでいる要因は多く、調査もままならない。時間と費用は莫大なのに、答えは今すぐに出すことを求められている。「科学的論拠が十全に示せないのにもかかわらず、政策が必要なのである。」仕方なく、「1割の科学的論拠、9割の科学的推論ということも珍しくない」状況で、提言的役割を果たしていくこともあるのだそうだ。科学的推論と言えは聞こえはいいが、要するに経験的な勘みたいなのである。鳥越自身の議論の運びは、「生活知」つまり地元の人々の知恵の大切さの話の方に行ってしまうのだが、この経験的勘に頼って「エイ、ヤー」で結論めい

たことをアドバイスするというのが、ラザーズフェルドの言う“gap-leap”なのであろう。

ところで、「エイ、ヤー」というのは誰だろうか。今の例で言えば、調査を依頼された鳥越自身のように読める。しかし、その時の鳥越は研究者であることを止めているのだろうか。最後の意思決定は、結局はモンゴル政府なのだろうか。あるいは、その共同作業なのだろうか。

先に挙げたオーストリアの洗濯屋の話の例で言えば、市役所で最近亡くなった女性の家族にアプローチしてみようというアクション（施策、対応策）を起こすのは洗濯屋の営業担当であった。「緊急事態という影響因」を突き止めるまでが研究者としての限界だった、とラザーズフェルドは言うけれども、そこから「不幸に見舞われた家族」に思い至るまでは、ほんの一飛びである。研究者自らが思い付いても少しもおかしくない筈だ。でも、そうした応用策を思い付く研究者は、もはや研究者の分を出ていると見なすべきなのだろうか。このあたりの問題が、彼の言う「ミドルマン」の存在と関連する。

4 「ミドルマン」とは何か

「エイ、ヤー」に至る過程、もう少し丁寧に言えば、社会学者による調査研究（＝知識）から実際の意思決定（＝行動）への“gap-leap”において生ずる「選択」には、3つの種類があるとラザーズフェルドは考えている。例示は、彼の例示を踏襲しないで、筆者なりに趣旨を説明すれば次のとおりである。

1) 一般的戦略の選択

日本は超高齢化社会に向かっている。「老い」は人々にとって多かれ少なかれ、不安の対象であろう。調査研究の結果、その不安を取り除くことが望ましいという結論が得られたとする。その時に、実際の意思決定ないし行動に向けては、なお二つの戦略がありうる。すなわち、老いに逆らって生涯学習や老人大学など、心身の若さを保つための戦略をとるか、それとも「死生学」や終末ケアを学習することによって不安を取り除く戦略をとるか。どちらもあっていいのではないかという

声も聞こえそうであるが、限られた資源をたとえば行政が予算配分するとなると、おのずからいずれの戦略に力を入れるべきかを決断しなくてはならない。

2) ターゲットとなる対象者とコミュニケーション・チャンネルの選択

今でこそ、携帯電話や PHS の利用者は多岐にわたっていることが知られている。しかし、当初は見込み違いや予想もつかないことが多かった。主たる利用者は、都会のビジネスマンだと考えられていて、じじつそうしたことを意識した宣伝やコマーシャルが多かった。しかし、実際には農作業に従事する農家で重宝がられた。少なくとも初期にはそうであった。また、高校生に今日ほど普及するとは考えられていなかったに違いない。新商品の売り込みは、どの層にターゲットをしばればよいか。介護保険制度がまもなくスタートする。さすがに最近では関心も知識も高まってきた。しかしなお、PR につとめるべきはどの対象に向かってか。対象者や層の絞りかたによって、高齢者か、40歳台か、将来の制度の担い手としての若者かで PR のための媒体が異なってくることは言うまでもない。

3) 一般的概念の明細化

先の洗濯屋の例を再びとりあげよう。「緊急事態」という概念は、一般的概念である。それを、「最近、女性＝主婦の亡くなった家族の状態」と解釈するのは、一般的概念の明細化にあたる。「緊急事態」を具体的には他のさまざまな状態、一たとえば「最近、夫を亡くして急遽妻が働きに出かけるようになった家族の状態」であれ、病人を抱えた家族の状態であれ一に明細化することは可能だろう。そのセンスは一体どこからくるのか。「緊急事態」概念そのものは、具体的な状態を指定しているわけではないのである。

ラザーズフェルドは、こうした当面3つの選択をする人間のことを「ミドルマン」と呼んでいる。確かに、上のいくつかの課題はなお社会学的調査研究を重ねることによって解決がつかかもしれない。しかし、先のモンゴルの話のように、時間的

に待てないかもしれない。ここには、「創造的な想像力」が必要だとラザーズフェルドは言う(1967: xxviii)。どこが創造的な営みかと言うと、「事実に関する知識を操作的な手続きに変換するための、制度的、技術的、あるいは象徴的な工夫(仕掛け)を思い付く」必要があるからだ。こうした工夫(仕掛け)を思い付くことは、自動的なルーティンワークでできることではないと言いたいのであろう。

「では、この想像力を提供するの誰の責任だろうか? 社会科学の役割が大きく広がっていくにつれて、新しい職業が生まれるかもしれない。それは、第3の力であり、社会学者とクライアントの伸をとりもつミドルマンである。彼は社会学者を理解する能力をもっており、スポンサーの実践的な問題についても通曉している。しかし、最も大切なことは、彼が自分に手渡された知識を使って、その知識から、社会学者やクライアントよりは多くの結論を導き出す能力をもっており、できることならそのための訓練を受けていることである。もし、彼のアドバイスを綿密に記録し分析するならば、そのこと自体、翻訳-ギャップ問題としての貢献となるだろう。」(同上)

これで「ミドルマン」の性格がぼんやりとではあれ、明確になったことと思う。私が大切だと思う点は、「ミドルマン」を独立の職業人として扱おうとしている点である。私はこの単純な一点こそ、いかにもラザーズフェルドらしい、だがそれにとどまらない卓抜な発想だと受け止めている。なるほど、社会学者に「ミドルマン」の役割を同時に期待しても一見さしつかえない。あるいは、ラザーズフェルドであれば、なしえたことかも知れない。しかし、社会学のすべてがクライアントの期待や注文に応えうるとは到底思えないし、すべての社会学者にそうした能力を求めることは無理である。社会学者と「ミドルマン」とは職業的に互いに独立だとしておくのがよい。

世の中には時代の変化とともに、新しい職業が生まれる。「職業」の定義にもよるけれども、当面は分業体系の中の独自の役割が認められさえすればよいだろう。因みに、行政管理庁の管轄下に

なる『日本標準職業分類』の職業の定義は、「個人が継続的に行っており、かつ、収入を伴う仕事をいう」である。「ミドルマン」が、押しも押されぬ職業となるには、意識的な運動と既成事実とが必要である。何よりも、現実的には生業として成り立っていただけの需要を生み出さなくては話にならないであろう。

5 「ミドルマン」の課題

以上で、「ミドルマン」のおおよその性格は理解できた。しかし、「ミドルマン」の具体的な課題となると、はっきりしない点も多い。ここではラザーズフェルドの議論にはとらわれずに、一般的な形でその点について考えておきたい。

5-1 クライアントとの橋渡し

「ミドルマン」は、クライアントの抱えている問題をよく知らなくてはいけない。クライアントの側に解決して欲しい課題や問題があるとして、彼らがそれを自覚しているかどうかは大いに疑問である。マーケティングの世界であれ、それ以外であれ、よく、ニーズの把握の大切さが強調される。しかし、ニーズは行為者の意識の底で眠っていることも少なくないのである。ニーズはニーズになりうることを知って、はじめてニーズになりうる。したがって、「ミドルマン」はニーズの掘り起こしを含めて、ニーズを正確に把握しなくてはならない。

クライアントの抱えている問題は、よほどの時間をかけて調べないと、よく理解できないことが多い。クライアントの現場からは、社会学者がとんちんかんな答えしか返してこないとか非協力だという不満とも揶揄ともとれる声を聞かされることがあるが、その原因の大半はクライアントの問題を正確に社会学者が把握しきれていないことによるように思われる。行政がクライアントになっている場合、行政にとっての施策可能範囲とでも呼ぶべきものが存在している。すなわち、政策としてどの程度のことを考えているか、どのくらいの予算をとろうとしているのか、また実際にとれるのか、を考慮に入れなくてはならない。その可能範囲を超えたアドバイスは、どれほどその内容

がすぐれたものであっても、現実のダイナミックスからすれば役に立たない。行政を批判することはやさしいが、それでは身も蓋もない。

社会学者による研究が完了したとしよう。社会学者が提示してきたものを、クライアントの要求に合うように具体化しなくてはならない。“gap-leap”と呼ばれた営みがそれである。社会学者が「二つの手」をもっていて評判が悪いとしても、「ミドルマン」までが両手を操ってはいけない。クライアントは、ほとんどの場合、一本化した答えを求めているのである。確かに、予想される副次的随伴現象やそれに対する対応策も視野に入れていないといけなければならないけれども、それに関連してあらたな仕事を依頼するかどうかはクライアントの決めることだ。

5 - 2 社会学者との橋渡し

「ミドルマン」がクライアントの問題を社会学的問題に翻訳できるためには、誤解を恐れずに言えば、社会学者以上の社会学的センスが必要である。社会学者の中では、たとえば理論と経験とか、理論と調査といったふうに更なる分業が行われていて当然の事柄であっても、「ミドルマン」はそれらの全体を知っていなければならない。どの程度の知識が要求されるかであるが、それはそうしなければ自分自身で請け負うことができるほどの知識である。「ミドルマン」は、その意味では社会学を理論と方法の双方にわたっておさえることができなければならない。専門分化は許されない。利用できる社会学者についての情報をもっておく必要がある。どのような問題ならどの社会学者にまわすかを的確に判断できるだけの情報は必要である。「ミドルマン」には、したがって社会学者以上のセンスが求められるだろう。このように考えてくると、クライアントが「ミドルマン」を兼務することは事実上無理のように思われる。むしろ、社会学者が「ミドルマン」を兼務することもたやすいことではないけれども、現実にはそれが唯一の可能な途であるように思われる。

参考文献

エンゲルス、F.、1960(1888)、『フォイエルバッハ論』

岩波文庫

橋本健二、1998、「戦後日本の階級構造」石田浩編『社会階層・移動の基礎分析と国際比較』1995年 SSM 調査研究会、pp.43-75.

平岡義和、1999、「企業犯罪とその制御」宝月誠編『逸脱』東京大学出版会、pp.121-152.

ラザーズフェルド、P.F.、1984、『質的分析法』岩波書店

Lazarsfeld, P. F., W. Sewell, and H. L. Wilensky, 1967. 'Introduction,' in Lazarsfeld, P. F. et al., (eds.) *The Uses of Sociology*, New York: Basic Books.

徳永恂編、1979、『マックス・ウェーバー 著作と思想』有斐閣選書

徳永恂・厚東洋輔編、1995、『人間ウェーバー 人と政治と学問』有斐閣双書

鳥越皓之、1999、『環境社会学』放送大学教育振興会
ヴェーバー、M.、1998 (1904)、『社会科学のおよび社会政策的認識の「客観性」』岩波文庫

ヴェーバー、M.、1936 (1919)、『職業としての学問』岩波文庫

An Encouragement to be a Middleman —A Note on ‘Useful’ Sociology (1)—

ABSTRACT

Paul F. Lazarsfeld once proposed a notion of ‘Middleman,’ a person who is supposed to play a role of mediating between the academics and the authorities, that is, translating clients’ problems into sociological problems to overcome the knowing-doing gap between social scientists and clients coming from administrative settings. Postwar Japanese sociology has refrained from being a policy-oriented field of study, probably because of over-commitment to either Karl Marx’s praxis or Max Weber’s value-free sociology. The present paper, after having reviewed Japanese sociology of the past, attempts to explicate and elaborate the Lazarsfeld notion of Middleman in contemporary terms.

Key Words : middleman, policy-oriented, uses of sociology